

〈巻頭論文〉

## ささえあいから生まれる「苦悩の語り」と価値認識の変容

梓川 一\*

\*東大阪大学

### “Narrative of Distress” Expressed from Mutual Support and Transformation of Recognizing the Value

Hajime Azusagawa \*

\* Higashiosaka College

キーワード	
ナラティブ	narrative
仲間	peer
苦悩	distress
ささえあい	mutual support
変容	transformation

#### I. はじめに～枠を越えて、そして原点に回帰して～

「学会とは何か」と問うてみることもある。辿り着いた研究成果を発表する、学問的・科学的な探索と思考を交互しあい、古きから新しきにつながる情報交換もできる、ここに求められる・期待される学会の使命があるだろう。しかし、それだけではないように思う。

第34回学術大会開催に向けて広報をしたところ、「学会は敷居が高い。研究者たちの、研究者たちのための集い」との多数の貴重なメッセージを頂き、学会が知らぬ間に築いてきた権威的な壁、学会の閉鎖性を、市民の方々から直接的に教わった。

「まず、壊すことから始めよう」。そのためには、今一度、「なぜ、研究をするのか。なぜ、学術大会を開催するのか」を再考しなければならなかった。研究は、学問の世界で新しい知見を発掘する、市民の世界へフィードバックする、それが学会の社会的意義となる。思うに、学問や科学の範疇を超えて、社会に向けてもっと広く、さらに深くあってはどうだろうか。科学が獲得し実証する現実も確かに必要であるが、「ある一つの現実」があるからこそ、人

と人は生きていけることがある。そこには人間が生きているゆえの価値もあり、生きていくための哲学もある。こうした志向を通して、人間そして人や社会にとって、かけがえのない学会の存在が認められ、広く市民の方々とともに歩む学会になるだろう。

第34回学術大会で「私たちが目指すもの、それは創り出すプロセスにあり、数値化・有形化・可視化できる成果を求めるのではない」、この私の考えを実行委員会で共有しあい、「当事者」をテーマに掲げ、どこに行き着くかもわからないことも認めあいながら、検討と研究を重ねてきた。「いったい当事者とは誰なのか」「すべての人が当事者ではないのか」、この本質を徹底して自問することから出発し、ノーマルな思考と理念をもって、妥協的な合意形成は求めず、テーマ「当事者」に果敢にチャレンジをしていく。「すべての人々が当事者として、当事者を考えあう・感じあう」、ここに正面から本気で問うていく。これらをやりぬくには、まず原点に立ち返ることである。それはこの道を歩み出したそれぞれの原点を見つめ直すことであり、謙虚な心から自他を尊重しあえる姿勢をもって探究し続けることである。今、振り返れば、私たちは原点回帰へ通

じあえる「揺るぎない信念」と「前向きな覚悟」はもっていたのだろう。

この学会誌の原稿の編集が、大会長としての私の最後の仕事になった。学術大会後の従来の学会誌にはないスタイルを開拓したく、多くの実行委員メンバーに執筆をお願いした。これら作品には一人一人のナラティブがあり、そこから味わいある当事者性が伝わってくる。

## II. ナラティブの魅力

ナラティブは、語りあるいは物語と訳される。やまだは、物語を「2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」、人生の物語を「その人が生きている経験を有機的に組織し、意味づける行為」と定義している<sup>1)</sup>。野村は「さまざまな出来事や思いをつなぎ合わせてなんらかの結末へと向かうお話」と説明し、「ひとはみなそれぞれの物語をかかえて生きている」という<sup>2)</sup>。

ナラティブの魅力とは、「どこに行き着くかもわからないままに走っていた子どもの頃の、あの懐かしい冒険のような心地良さ」と「いつも友だちと一緒にいた安心感」にあると思う。私がナラティブを語れば、聴き手のナラティブも目覚めていく。ナラティブをとともに辿っていけば、多彩な登場人物が次々と現れてくる。日頃の生活のなかに埋もれているナラティブも発掘して、あの日の思い出に再会できるのかもしれない。

私は今日まで生きてきて、「人生とは、出会いと経験の物語であろう」と感じるようになり、私自身の人生に向きあえるようになれた。これから始まる「患者仲間とのナラティブ」を皆さんとともに辿りながら、ゆったりと彷徨いながら「生きること」を感じあいたい。

## III. 価値の相違と変容の認識

### 1. 普通の世界と患者の世界

30歳のときに、私は病いと出会い、そして病いを経験する<sup>3)</sup>。入院した脳外科病棟の患者の方々の症状に、不安と怖さばかりが大きくなっていった。手術日は無情にもやって来た。手術後の集中治療室は、常に空調が効き、明るくて、機械音がして、日常生

活からは隔離された特別な空間だった。第三者のように自分をみれば、少しは楽になれたが、普通ではない世界にいる私の存在が信じられなかった。いつの間にか、私は内面に「普通の世界」を築いていたのだろう。「ここを早く出なければ、元の世界に戻れなくなってしまう」、さらなる不安に襲われていく。

その後、一般病室に戻った私は、患者の方々に心は開かず、意思疎通はできなかった。普通の世界と患者の世界を区分していたのだろう。相対的価値を重視する社会で生活をしていると、優劣や正誤を判定するかのような単一的な価値認識をもってしまう。そして多様な状況に対応はできなくなり、人間としてもろくなってしまふ。水野は、次のように述べている<sup>4)</sup>。いわゆるエリート社員は、常に成功を目指して生きている。成功と失敗しかない二分化された価値認識に基づく人生観をもつ人間からすると、病む人間には、普通の生活から落ちこぼれた人生の落伍者の烙印が押されてしまふ。

### 2. 変容への出発

ある日、私は病室でコップを割ってしまう。そのとき、病室の患者さんたちがすぐに私のところに来てくれて、割れたコップを拾い集めてくれた。「どうして、ここまで私のことを心配してくれるの」。自分のことよりも、他人のために迷わず行動することができる彼らの姿に驚いた。「仲間として、ともに生きていく」ことを感じた病室での一場面であった。このような経験を重ねていくうちに、そして病いが進行していくうちに、私の内面である変化が起き始めていく。

入院をした時には「患者だけにはなりたくない」思いばかりであった私が、いつの間にか、患者さんたちと打ち解けて話をしている。「今の苦しい気持ち」「これまでどのように生きてきたか」「弱くて惨めな私」について、ありのままに語り出している。自分に素直になり、自己開示をしていく。聴いてくれる「仲間」を感じていく。「なんて居心地がいいのだろう」「なんてありのままの私を認めてくれるのだろう」。おそらく、これまでの私が過ごしていた普通の世界、会社の世界にはない「何か」を感じていたのだろう。

健常者たちで構成する普通の世界には、他者と比

べて自分が優位になることを意識する生活があるだろう。患者の世界では、日常生活で意識するような自他の優劣・強弱・上下の差異には意味も価値もないことがわかってくる。私が入院した病棟は重篤な病状の患者さんが多く、今思えば、「生きていることそのもの」に人間の価値をおいていたのだろう。患者さんたちとともに過ごすことによって、「人と比べて優劣をつける」相対的価値から、「人それぞれが持っている、光り輝くような」絶対的価値へ、私の価値認識は変わっていく。

#### IV. ささえあいの意味

##### 1. 仲間と仲間のささえあい

仲間の存在と関係からささえあいは生まれてくる。さらに「同じ経験をもつ、同じ環境にいる」患者仲間だからこそ、共感ができ、ともにいることができる。

「ささええる」とは、自分の力で自立している人が、自分の力で自立できない人に手助けをすることである。「ささえあう」とは、自分の力だけでは自立できない者同士が、互いに手を差し伸べあって二人でともに立つことであり、この二人はともに他立である<sup>5)</sup>。ささえあうには、「弱くあっていい」というメッセージがあり、弱くあることが認められている。そして、相対的価値認識の世界で勝ち抜くために身にまとってきた鎧を脱ぎ捨て、今の自分の「ありのままさ」を自他で認めあって生きていくことができる。

岩田は、セルフ・ヘルプ・グループに着目して、仲間同士のささえあいの特徴として「互いが対等である」「互いの体験を内側からわかちあえる」「一体になることができる」「親しみをもって身近に相談できる」などを挙げている<sup>6)</sup>。

このようにささえあうことで、人間として対等であるがゆえに、共感・体感ができるのであり、そこから仲間同士でともにいることで、生きていく力を高めていくことができる。

##### 2. 相互支援の関係性

リースマン (F. Riessman) とアラン・ガートナー (A. Gartner) は、ヘルパーセラピー原則を「援助を与えることによって、自尊心や自信などを獲得したり、自らの問題の対処能力を高められる」と説明

し、助けあう関係性において援助をしている者が、実は最も援助を受けているという<sup>7)</sup>。要するに、人と人が向きあう関係において一方通行の援助はないのである。さらに仲間同士でささえあうことから生まれてくる利益として、「①依存的であることが少なくなる。②自分が抱える問題に距離をおいてみる機会が与えられる。③社会的に役立っていると実感できる」を挙げている<sup>8)</sup>。特に、「社会的に役に立っている (= 社会貢献)」ゆえに、「(私は) 必要な存在」であると、本人が実感できることで、人は社会関係の中で生きていくことができる。

ここには相互支援の関係性がある。ミルトン・メイヤロフ<sup>9)</sup> は、次のようにいう。まず、ケアをするとケアをされている、つまり、ケアは双方向なのである。次に、ケアし・ケアされる関係性において、人間的にも成長していく。そしてその人間的成長を感じていくことで、「今、生きている」「生きている意味」を感じることにつながる。相互支援の関係性からこうした人間の生の深まりへと展開していく。

##### 3. 存在の認めあいからの変容

仲間と仲間のささえあいとは、あなたと私の「存在を認めあう」ことであろう。この認めあうとは、互いの共通性ととともに、それぞれの価値観も尊重することである。相互支援の関係性において「相手と一体である (同一性) と感じると同時に、相手のもつかけがえのない独自性、また自分自身のもつ独自性 (差異) をよりしっかりと意識する」 (= 差異の中の同一性)<sup>10)</sup> ことが大切である。これが絶対的価値の尊重にもつながる。

これまでは何もできない無力の存在であった自分が、仲間とともに生きる経験をする、仲間をささええる経験をする、仲間からささえられても実感する。こうした関係性を築いていくことで、患者仲間のなかで変容が始まり出す。あなたを心から思う気持ちが湧いてきて、「(私にとって) あなたは必要な存在」であると互いが感じあい、「他者へのあたたかな関心」から、「主体的な自己犠牲」ができる、そして仲間同士がささえあう。このような患者仲間の相互支援の関係性のプロセスにおいて、自己肯定感 (= 「自分にも価値がある」) が生まれ、ありのままの自分に気づき (= 「このままでいい」)、

そして「今、ここにいる」自分を感じていく。

## V. 苦悩のナラティブ

### 1. 宿命を受け入れるナラティブ

私の隣に中学生の男子が入院してきた。彼は交通事故後の頭部CT検査で、腫瘍が見つかった。毎年夏休みに入院して開頭手術を受けてきた。手術当日の朝、病室にストレッチャーが運ばれてきた時、彼は「なんで、僕をこんな体に生んだんや」とお母さんに言った。お母さんは毅然として彼の頬を叩き、「早く手術をしておいで」と言った。両親と患者仲間に見守られながら、彼は手術室に入っていった。そして手術室の扉が閉まった瞬間に、お母さんは大きな声を上げて泣き崩れた。

彼は宿命を抱えながら、「明日も生きる」気持ちをもって、懸命に生きてきた。覚悟をもって生きてきた彼は、それでも生きていくために、手術を受ける前に、どうしても苦悩を吐き出さなければならなかった。彼から「まだ生きていたい」「もう生きることができない」苦悩のナラティブを聴き、「宿命的な生を生きる意味は何であるのか」「苦悩し続けてきた彼の人生、生の存在とは何だったのだろう」と深く考え続けていた。

病室で苦悩のナラティブを語りあうことで、私は彼から、彼は私から、「どのように生きぬいていくのか」を聴きあっていたのだろう。彼は私に「(死を前にして)それでも生きていく」ことの意味を教えてくれていたと思う。彼のナラティブは、彼の生のうちに一旦は完了したのかもしれない。しかし、彼が遺してくれたナラティブは、今も私の中に生きている。ナラティブは決してなくならない、常に生きている。最期まで生きぬいた彼のナラティブは、患者仲間生きていく勇気を与え続けている。

### 2. 確定した現実に向きあうナラティブ

入院中の私は、朝に目覚めると、心身のすべてで幸せを感じて、今の生活がこのまま続いてくれることを願っていた。しかし、その後、そのときの私にとって望ましくない方向に私のナラティブは作られていく。私は転院し、次の病棟で、さらに厳しい治療をする患者仲間に出会う。

転院後の10日目に、私は難病告知を受けた。不

思議な感覚だった。どうしても受け入れられない自分もいるが、ようやく向きあう相手に出会えて、ほっとするもう一人の自分もいる。さらに医師から「この春に向けて、人生をお考え下さい」と告げられた。これこそが「現実」として、誰も訂正してくれない「確定された現実」を突き付けられると、ただ必死に受け止めるしかなく、にわかにならざるやうに「覚悟をもった自分」と「冷めた自分」を内面に築き上げて、私はその場に壊れていきそうな自分を懸命に守っていた。しかし、これまで生きてきた「この私」「この私のからだ」はどうなってしまおうのだろう、私の存在が消えてしまうことに底知れぬ恐怖を感じて、身体の震えは止まらない。そうすると、これまで私が生きてきて、作られてきたナラティブのさまざまな場面が次々と浮かんで来て、懐かしい方々に再会することもできたのだった。

病院の前には、私の散歩道があり、そこにベンチがある。私はここで一人になり、いつも私のナラティブと向きあっていた。私にとって大切な場所であり、時間であり、私だけの世界・空間であった。「なぜ、自分だけがこのようになるのか」「まだ、生きていたい」、怒りにも近い感情がこみ上げてきて、涙が溢れてくれることもあったが、どうしても涙が出てくれないこともあった。不思議なことに、自らの死に向きあう私にとって、このベンチから見渡せる光景は、いつも、すべてに、穏やかで、平和で、新鮮な輝きに満ちていた。

### 3. 生活や人生を包み込むナラティブ

消灯後に、病室の仲間と語りあった。彼は「もう苦しくて、もうダメだ」と言い、「抗がん剤はやめる」ことを決めていた。日曜日に家族が見舞いに来られた。「お父さん、最後まで病気と闘うと言ったでしょ。どうしてやめるの」、カーテン越しに聞こえてきた。彼の声は聞こえなかった。家族は涙しながら「最後まで闘ってよ」を繰り返した。

その夜、彼は「もう一度やろうと思います」と言った。再び抗がん剤が投与されて、その三週間後に彼は亡くなった。「家族はなんて辛いことをするのだろう」、本人の自己決定と家族の決定の存在とそのパワーバランスに、私は悩み続けた。

家族の決定によって彼の自己決定もナラティブも

変えられてしまったのだろうか。彼は「どのように生を全うするか」を自己決定し、自らの人生のナラティブを作り出すつもりでいたのだろうか。しかし、本人の自己決定ではなくて、家族の決定によって治療方針が決まっていく。人間は、常に自己決定をして生きていく存在であり、常にナラティブを作っていく存在でもある。自己決定とナラティブは、どのようにつながっているのだろうか。

個人の人生の物語（ナラティブ）はどのように作られていくのかに焦点をあてると、必ずしも、本人が自己決定をして自分の人生を決めなければならないことはない。つまり、ナラティブは、自己決定の範囲と条件を限定化・固定化するものではない。本人の人生の物語（ナラティブ）は、本人が自己決定しようと、家族が本人のために決定しようと、家族が本人の代わりに決定したとしても、すべて人生の物語としての本人のナラティブに変わりはない。ナラティブは個人の生活状況や心情までも認めて、それらすべてがその人の人生の物語になっていく。ナラティブは、生活上の事情に正誤も優劣もつけることなく、個人の生活全体を包み込んでいく。ゆえに、そのなかには生活や人生における喜びも苦悩も、すべてが含まれている。ナラティブをそのまま受けとめていくことは、過去から現在に至る苦悩も認めていくことであり、（それは本人にとっては苦しいことではあるが、）ゆえに人生における苦悩に向きあうこともできる。

このようにナラティブとは、必ずしも本人の自己決定によって作られるとは限らない。本人と他者でわかちあいながら、共同で人生の物語を作り上げていくプロセスが、ナラティブのスタイルだからである。つまり、家族の決定が彼のナラティブまでも変えてしまったのではないのであり、ここに自己決定とナラティブの関係性を捉えることができる。

この数年後、私は恩師に苦悩を打ち明けた。「お父さん、ほんとに辛かったですよね。でも、このお父さん、ほんとに幸せ者ですね。娘さんに『生きて、生きて、最後まで闘って』と言われたお父さんは、ほんとに幸せ者ですよ。お父さんは本望ですよ」。彼は、お父さんとして幸せな人生を全うしたのであった。

## VI. 物語的現実のなかで生きる存在

### 1. 科学的現実を基盤とする生活

モダニズムの文脈には、確たる現実には既に存在する考え方が根底にある。既存の「現実の一つである」との観点から、科学は現実（＝科学的現実）を探究していく。つまり、科学の力によって、現実人間の生活の内外においてより明解なものになり得ていく。

科学的現実には、人々の生活には確かに必要であろう。ただ、科学的現実には満ちている状況で生活していると、現実とはすべて科学的現実のことであり、既に確定していることを前提として受けとめて、人々は社会生活を営んでいくことになる。そうした現実について、科学の言語による理論的・客観的説明に納得して、人々は生きていくことになるだろう。

### 2. 社会構成主義から捉える物語的現実

ガーゲン（Kenneth J. Gergen）らは、「現実とは、社会関係や人間関係から構成されていく」のであり、「既に存在するものではない」、「人と人との関係性における対話、そこでの言葉のやりとり、語り方の慣習から決まってくる」という<sup>11)</sup>。これは社会構成主義が根拠になっている。現実とは、日常的な言語、人と人との関係性に基づく対話を通じて社会的に構成され、作られる。つまり、それぞれの主体者が向きあい、その関係性から現実が作られて、そしてナラティブは誕生してくる。こうしたナラティブとは、多様な関係性と経験を含む人生の歩みであるがゆえに、極めて独自性に富んでいる。

患者仲間が向きあっても作り上げていくナラティブとは、彼らがともに生きてきた証であり、それらを振り返ることによって生きてきたすべての瞬間を改めて感じることができる。病いと向きあう人生を経験すると、科学では説明がつかない現実が脈々と続いていることを感じる。物語的現実はあるだろう。アンダーソン（Harlene Anderson）とゲーリシャン（Harold Goolishian）は、「人は他者とともに作り上げた物語的な現実によって、自らの経験に意味とまとまりを与え、そうした構成された現実を通して、自らの人生を理解して生きる」という<sup>12)</sup>。

科学的現実だけの生活環境では、自分を防衛する

ために身構えて生きていくことになるだろう。物語的現実が作り出されることで、ありのままの自分で生きていくことができるだろう。苦悩をもつ一人の患者にとって、仲間とともに物語的現実を認めあえることは、今生きている存在を認められることでもある。物語的現実のなかにいる「私という存在」を、他者からありのままに認めてもらえることで、「(自分の生は)このままでいい」と自分に素直になり、仲間という他者を信じて、安心して自己開示や感情の表出ができるようになる。こうして自分と他者という仲間の関係性が構築されていく。

## VII. 仲間との生活～今を生きる幸せ～

### 1. 小さな達成がある積極的幸福

何かを達成できることで感じる積極的幸福がある。車椅子で外出して花見をしたり、病室から夏の夜の花火を楽しんだり、ささやかなクリスマス会をしたり、患者仲間はいつも一緒だった。病室には、医師も看護師も家族も知らない患者仲間の生活があった。検温後の夜の病室で、生い立ちや家族のことを語りあったりもした。私たちにとって、すべてが大切な達成だった。どこにでもある幸せ、普段なら見過ごすような幸せを感じあうことができていたのだろう。

### 2. 今を感じる消極的幸福

今、今生きていることを感じる消極的幸福もある。消極的幸福には、静かで豊かな幸福感がある。患者仲間で「最期まで生きぬこう」そして「天国で会おう」と笑顔で約束した。これは仲間同士で「これからもずっと一緒」と、私たちの生と存在をわかちあう表現だったのだろう。そうすると、告知を受けた仲間同士が、一時でも「ただただ平安な今」を味わいながら、病棟内で穏やかに過ごしていくことができた。

### 3. 生きることに集中できる幸福

今生きていると、誰しもが様々な苦悩や苦痛に向きあわなくてはならない。苦悩や苦痛は人生における悲嘆や喪失でしかない状況もある。しかし、日々苦悩や苦痛があることで救われることがある。これから受ける検査や治療のことばかりを日々考えてしまうこともある。辛く厳しい状況や環境に身を置くと、

今を生きることに集中することができる。苦悩や苦痛をもちながら、苦悩や苦痛に向きあっていると、苦悩や苦痛からメッセージが届く。苦悩や苦痛があるがゆえに、一回性の人生において、「今、確かに今生きている」「今、ここに存在している」と実感できる幸せもある。

## VIII. 生と存在の苦悩

### 1. それでも生きていく苦悩～ともにいてくれる存在～

点滴の治療はひどく気分が悪くなるために、病室のベッドで点滴を受けることはできなかった。私はいつも点滴台を押して、トイレの洗面台の前で力尽きるようにひざまずき、嘔吐をしながら点滴が終わるのをただ耐えていた。今後どうなるかわからない状況のまま、厳しい治療に耐えることはあまりにも苦しすぎる。生きるための気力も消えてしまいそうになる。そのようなとき、担当の看護師はいつもナースステーションから一枚の毛布をもって私のところに来て、背中にかけてくれた。そして私と同じようにトイレでひざまずき、背中をさすり続けてくれた。人間には、どうしても一人では生きていけない状況もある。そのようなとき、「その場に居続けて」「ともに歩む」姿勢に救われた。ここに援助の原点がある。

ここまで生きぬいてきた私たち患者仲間に、それぞれの人生は「いかに生きるか」「生きるこの意味とは何か」を問うてきたのだった。ともに生きてきた仲間たち、私を支え続けてくれた仲間たち、私の人生の変容を促してくれた仲間たちが、天国に旅立っていった。「それでも生きていく」と、私は心に決めた。このときの私に、どうしてここまで生きぬく力が湧いてきたのかはよくわからない。きっと、あの中学生の彼とのナラティブが今生きている、天国で再会しようとかわちあった仲間とのナラティブが今生きている。彼らとのナラティブが、私に生きる力を与えてくれていたのだろう。

私も近いうちに仲間のところに行くことを覚悟はしていたが、私だけがこの世に残ってしまったことに、「仲間を裏切ってまで、生きていてはいけない」という罪悪感を抱えていた。そこから私は生

きることに苦しんでいく。

## 2. 受け身的に与えられた人生を生きる苦悩

一人残された私は、車椅子で病室を出て、毎夜一人で夜景をみていた。ある夜、一人で夜景を見ている患者さんに会おう。それから二人のナラティブの行き来が始まる。「ただ、一緒にいる」静かなナラティブもある。心通じあっている仲間同士に言葉は要らないのだろう。

彼は「どうせ死ぬのであれば、辛い治療はしたくない」思いをもっていた。彼は、生きることに無気力のまま、前向きに治療をしない自己決定を望んでいた。しかし、家族の決定により抗癌剤治療および手術が施された。結果として、奇跡的に一命を取り留めたが、望まなかった人生が受身的に与えられ、その後の人生を生きていくことになった。「自分はすでに死んでいた。新しい自分に生まれ変わらなければ、生きていけない」と、彼は語った。

個人の自己決定は、結果ではなく、過程が問われる。本人がどのように納得できるか、これが前提になる。斎藤は、「たとえ、その実行が本人にとって『最善』と思われるものであっても、本人が選び取ったのではない限り、自己決定ではない」という<sup>13)</sup>。J・Sミルも、「最後に断を下すべき者は、彼自身である。彼が、他者の注意と警告とに耳を傾けずに、犯すおそれのあるすべての過ちよりは、他者が彼の幸福と見なすものを彼に強制することを許す実害の方が遙かに大きいのである」という<sup>14)</sup>。

納得できない自分の人生を歩むことは、生きる者にとって最大の苦悩であるに違いない。それでも人生は止まらない、気づけばすでに進んでいる。受け身的に与えられた人生をこれからも生きていく、その一瞬一瞬に彼のナラティブは作り続けられていくのである。

## 3. 存在の苦悩と意味づけ

彼と私の共通点は、生きていくことに苦しんでいることであつた。彼も、私も、自分の存在を否定しなければ生きていけない状況にあつた。このときの私たちは、自らがおかれた状況において「いかに生きるのか」を自問し続け、これから生きていくために自分の存在を懸命に確かめようとしていたのだろう。このような状況におかれて、なお生きていくた

めに、自分の生きている意味を見出そうとしていたのかもしれない。

人生の物語（ナラティブ）の意味づけは、患者が向きあわざるを得ない重いテーマになる。自分を絶望へと追い込み、最大の敵でしかない病いに、容易く向きあえるものではない。人生の物語の意味づけをするためには、病いとともに歩んできた自分の人生を振り返らなくてはならない。病いに苦しめられてきた自分、病いによって人生が変わってしまっている自分に向きあわなければならない。自らのナラティブ（物語、語り）にどのように向きあえばいいのだろうか。

バイロン・グッド（Byron J Good）によれば、「物語化とは、苦悩を歴史のなかに位置づけて、出来事を時間のなかで意味のあるように編成する過程である」<sup>15)</sup>。楡木も、「語りはすべての一見不連続のように見える経験をつなぎ、その人なりの人生の意味をつくり出す作用をもっている」<sup>16)</sup>という。このような機能をもつナラティブ（物語、語り）が、苦悩に向きあうチャンスを与えてくれて、そして意味世界へ導いてくれる。換言すれば、人間は生きていくために「自己の存在を問う」苦悩を抱え、そこから意味づけに向かおうとしていく。

第一に、関係性と存在の苦悩がある。社会的存在として社会関係を取り結ぶ時、患者も一人の人間としてこの苦悩に直面する。「私は必要とされているのか」の問いをもつ。必要とされていない心理状況で生きていくことはあまりにも苦しい。

第二に、意味世界における苦悩がある。「私には生きる意味があるのか」、自らの存在に苦悩する。この苦悩と向きあいながら、患者個人の意味世界のなかで「なぜ、この病いをもたなければならなかったのか」「自分の人生において、病いの意味は何であるのか」を問い続ける。対して、彼（患者個人）は自らの人生から「いかに生きるのか」の問いを受けていく。

このような「自己の存在」を問う苦悩を抱え、問い続けることは苦しいことであるが、それでも生きていくために、本人のなかで苦悩の意味、病いの意味、人生の意味を感じ始め、探し求めていくのだろう。

## IX. 存在の苦悩から価値認識の変容へ

### 1. 生きているゆえの苦悩

「このまま生きていてもいいのだろうか」。私の苦悩の問いは、私の生の「存在」に根ざしているゆえに「存在の苦悩」と言えるだろう。「天国で会おう」と仲間たちとわかちあったが、私だけが生き残るというナラティブから、私の問いは生まれている。生き残った彼と私は、命を与えられた受け身の「存在」になる。その後も生きていくためには、生きているゆえの苦悩（＝存在に苦しむこと）に向きあひ続けなければならない。フランクは、「困難に対してどのような態度をとるかということのうちに、その人本来のものが現われ、また、意味のある人生が実現される」と言う。つまり、「苦悩で意味のある人生を実現する」<sup>17)</sup>のである。私がどのように生きていくのかによって、私が未だ気づいていない、ありのままの自分に出会うことができ、そこから私の人生は意味あるものになるのかもしれない。

### 2. 存在することの人間の価値

私の「存在の苦悩」に答えてくれた「仲間の存在」と「ナラティブ」がある。

第一に、ともに泣いてくれた仲間の存在にあった。生き残ってしまったこと（＝存在）の罪悪感から苦悩していた時に、親友が見舞いにきてくれた。彼は、自らの存在に苦しむ私に「何もできなくて、ごめんな」と、私のそばに居て、私のために、ただただ泣いてくれたのだった。私は安心して、もう一度、私の人生に向きあひ始めていく。

第二に、天国へ旅だった仲間たちからの手紙であった。そこには「いきて」とだけ書かれてあった。この三文字のメッセージには、辛い時も、悲しい時も、そして嬉しい時も、ともに過ごしたあの日々のナラティブから、私への思いが込められている。私の心の中には、言葉や文字では表現できないナラティブ、ともに過ごした時間・空間のナラティブ、映像として蘇るビジュアルなナラティブもある。

こうして、私は「ここに確かに存在している」と改めて気づき始めていく。極めて感覚的ではあるが、自らの生に対して目覚めるものがあつた。「私は、生きていてもいいんだ」という安心感が心の中に少しずつ満ちてきた。このような私が行き着いて

きたところは、「生きることを求めていく前に、生きていることそのものに価値があり、今ここにいるそのままの私であることに意味があるのではないか」であった。秋山が唱える存在有意観<sup>18)</sup>とは、自分が存在していることに意味があること、自分が必要な存在であること、これらを自分も思っているし、周りの人も思っているという認識である。つまり、「存在していることだけに価値があるという人間観」<sup>19)</sup>である。所有しているから価値がある認識（＝Haveの価値認識）ではなく、存在していることに価値があると捉える認識（＝Beの価値認識）である。

苦悩の存在には意味がある。苦悩により「今、ここに生きている」ことを体感することができるのであり、人間は実存を体得できるのである。

### 3. 苦悩に向きあえるナラティブの再考

ナラティブには、プロセスと背景がある。ナラティブとは、生きてきた証であり、過去から現在そして未来へと続くのであり、さらにそれは点や線ではなく、極めて立体的であり、無限の空間へ広がる可能性をもっている。社会構成主義にみるように、人と人との日常的な会話と関係性から物語的現実を作りだしていくナラティブは、自由にして一定の枠に収まるものではない。

ささえあう相補関係から作られてくる患者仲間のナラティブは、いつまでも互いの内面で共有されて、行き来しあって、それぞれの仲間の内面で生きている。そこから新しいナラティブは構築されてくる。こうして今の私も新しい人生を歩み出していくことができているのだろう。私には常に私の人生があり、私はここに存在していると、私のこの身体に触れて「今も生きている」と感じることができる。

ナラティブとは、ありのままを求めて、すべてがそのままなのである。そのために厳しさもある。苦悩は苦悩として向かいあう。仲間の死も人生における出来事や経験としてありのままの物語になっている。しかし、科学的現実ではなく、物語的現実を展開してくれる。それぞれの人生における内面を汲み取り、仲間同士の間を行き来するナラティブを通じて、人と人はささえあい、苦悩を語りあうことができる。そして人生における様々な出来事や経験を物

語の現実のなかで認めあうことによって、ともにわかちあう関係や空間を生み出してくれる。こうして苦悩の人生から逃れるのではなく、仲間とともに人生に向きあうことができ、そのうえで「ありのままの私とあなたでいい」と認めてくれる。そして気づけば、変容を遂げている。

## X. おわりに～ナラティブは生き続ける～

私の内面には、仲間との素敵な出会いと経験のナラティブが豊かに存在している。あるとき、私が仲間たちとのナラティブに向きあいたくなれば、たとえ彼らは亡くなっていたとしても、あたかも物語的現実映し出すかのように、あの日々は蘇ってきてくれる。仲間とともに過ごした病室での語りあいも、ささえあって懸命に生きぬいた日々のナラティブも、今もなお、私の中で確かに生き続けている。そしてナラティブをとともに作ってくれた仲間は、今も私のなかで生きている。仲間にも恵まれて、今を生きている私は幸せ者だと心から思う。

第34回学術大会は、「当事者を感じ、語らう」「原点回帰」をテーマとした。「生物としての人というのは、それは死ぬ。だけど、人間というのは、人と人との関係の中で生きている。語ってきたことは、死なない」。初代会長の中川のメッセージこそ、ナラティブとして生き続けるだろう。

第34回学術大会にもナラティブがある。皆さんとともに創りあげたナラティブがある。それは、すでに私の人生におけるナラティブにもなっている。参加者同士の出会いと語りから結実していった第34回学術大会は、悠久の都・奈良で物語的現実となり、そして皆さんとわかちあえたナラティブは、これからも豊かに生き続けていくことだろう。

## 謝辞

中川会長をはじめ、第34回学術大会にご支援を賜りました学会および市民の皆さまに、心からお礼申し上げます。

毎回の検査結果と症状に落胆し、不安を抱えながら学術大会に臨んでいた大会長の私を、実行委員会では、いつも皆さんがあたたかく支えて下さった。実行委員会は、私にとって平安な砂場でした。皆さ

んがいつも一緒にいて下さったことで、明るく前向きに生きる意欲が生まれてきて、幸せを感じながら基調講演の舞台に立っていました。皆さんとともに過ごした日々は、私の大切な人生です。

## 引用文献

- 1) やまだようこ編著：人生を物語る，1-3，ミネルヴァ書房，京都，2000
- 2) 野村裕二：物語としてのケア，20-21，医学書院，東京，2002
- 3) アーサー・クライマン，江口重幸・五木田紳・上野豪志訳：病いの語り，iii，4，誠信書房，東京，1996
- 4) 水野治太郎：ケアの人間学，120-121，ゆみる出版，東京，1991
- 5) 森岡正博，赤林朗，斎藤有紀子，佐藤雅彦，土屋貴志：ささえあいの人間学，法藏館，京都，83-84，1994
- 6) 岩田泰夫：セルフ・ヘルプ・グループへの招待，107，川島書店，岐阜，2008
- 7) アラン・ガートナー，フランク・リースマン，久保紘章監訳：セルフ・ヘルプ・グループの理論と実際：人間としての自立と連帯へのアプローチ，117，川島書店，岐阜，1985
- 8) 前掲書07) 117，1985
- 9) ミルトン・メイヤロフ，田村真・向野宣之訳：ケアの本質－生きることの意味－，13-16，ゆみる出版，東京，1987
- 10) 前掲書09) 186，1987
- 11) シーラー・マクナミー，ケネス・J・ガーゲン編，野口裕二・野村直樹訳：ナラティブ・セラピー－社会構成主義の実践－，19，金剛出版，東京，1997
- 12) 前掲書11) 62-65，1997
- 13) 再掲05) 31，1994
- 14) J・Sミル，塩尻公明・木村健康訳：自由論，155，岩波文庫，東京，1971
- 15) バイロン・J. グッド，江口重幸・五木田紳・下地明友・大月康義・三脇康生訳：医療・合理性・経験，222，誠信書房，東京，2001
- 16) 楡木満生：患者の語りは病いを連続した人生

- の一部にする, 日本保健医療行動科学会年報  
Vol.21, 巻頭言, i, 2006
- 17) V. E. フランクル, 山田邦男・松田美佳訳:  
それでも人生にイエスと言う, 37-38, 春秋社,  
1993
- 18) 秋山智久:社会福祉実践論, 346, ミネルヴァ書房,  
京都, 2000
- 19) 前掲書 18) 346, 2000